

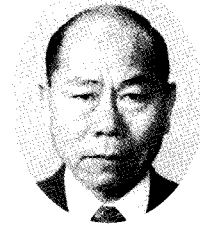
いるま

第 33 号

題字 会長
平成31年2月1日
発行者
井上 清

学校と地域社会との協働に支援を

副会長 鈴木 文治



今、学校現場では、改訂された学習指導要領に基づく新教育課程の編成とそれに伴う移行措置が、精力的に行われている。このような時期だからこそ、校長経験者の集りの本会には、現職校長や学校への支援が期待されている。

今後の改訂では、よりよい学校教育を通して、よりよい社会を創るという目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質能力を子どもたちに育むため『社会に開かれた教育課程』の編成を求めている。学校がその目的を達成するため、学校や地域の実態等に応じ、教育的な体制を家庭や地域の人々の協力を得ながら整えるなど、家庭や

地域社会との連携及び協働を深めること。また高齢者や異年齢の子どもなど、地域における世代を越えた交流の機会を設けることなどに配慮するとしている。つまり校長には教職員の先頭に立ち、リーダーシップを発揮し、カリキュラム・マネージメントの実施が求められているということである。

教育という道を想う

入間地区中学校校長 野口 隆司



次期学習指導要領が平成二十九年三月に公示され、その中で、われ

われの教育の向かう道筋が新たに示されました。昨年十一月、私は、国立新美術館で開催されている東山魁夷の

ところで、学校を取巻き支える団体には各種ある。当会もその一つである。PTA、社会教育団体、文化団体、スポーツ団体、各種の学校等、福祉関係団体、地域の高齢者等かなりの数に上る。今までは、学校の要請に応じて、個々に対応していたのが実情であろう。我々教職経験者もそうであった。

それでは、学校と地域社会との協働深化を図ろうとするには、意図的・計画的であるとは言いが切れない。学校協力者・支援者を組織化して、学校との協働体制を築くコーディネーター役が必要である。教職経験が豊かで、学校の実情にも精通している、また地域の実態や人間関係も熟知している当会の会員の出番ではないだろうか。

生誕百十周年を記念する展覧会に足を運びました。「残照」や「道」は、魁夷の代表作です。

今回私が一番見たかった作品は「道」です。館内で一番混雑していたのはこの絵の前でした。絵の正面にやっと進めたと思うと、感動と共に考えることがありました。「道は、最初からあったのでは

ない。先人の手によって切り拓かれ、数え切れない人々に何度も踏み慣らされて、やがて形を成してゆく。人はこれまでそうやって道を作ってきた。そして、これからも永遠に作り続けるのだろうか。」以前見た時とは異なり、これまで自分自身が歩んできた道を背中に感じ、そして、これから始まる未来へ向かう希望の道を考えていました。

今日、社会の変化は激しく、中学校教育の担う役割は、益々大きくなってまいりました。道徳教育や英語教育の新時代もやってきました。新学集指導要領への円滑な移行に努めた一年、部活動の運営や教職員の働き方改革などの新たな課題に各班校長会が連携を取り合い、協議を重ねた一年となりました。入間地区校長会では、今後も小学校長会や教育委員会との密接な連携を図り、中学校教育の研究と諸課題の解決に邁進して行きたいと思えます。

結びに、今年、様々な分野で活躍された入間地区校長会の先生方、退職された諸先輩方には、様々な「道」を作っていたいただき感謝いたします。これらの道は、今後も教育界の標石となり、永遠と輝き続けるのだと信じています。(入間市立向原中学校)

教育の日協賛

教育推進研究協議会開催される

期日 平成三十年十一月九日
会場 日高市生涯学習センター

今年度の教育推進研究協議会は、日高市退職校長会が担当し、盛大に開催されました。

来賓五名、小学校長三六名、中学校長一六名、退職校長八三名の一四〇名が一堂に会し、三名の研究発表と研究協議が行われました。開会行事では、井上清会長の挨拶の中で退職校長と現職との連携を図ることが大切であるとの話の



会場風景

後、来賓の中村一夫日高市教育長、石田孝作埼玉県退職校長会長から今進めている事業概要等に触れながら激励の挨拶をいただきました。

研究発表では、宮崎厚・杉本竜之両校長から、着実に成果を挙げている教育実践の報告がありました。退職校長会の小山恒夫氏からは、伝統文化の継承を守る会の地域活動の報告がありました。

三名の研究概要は、以下に掲載しました。
長岡伸一西部教育事務所副所長から、県の教育行政重点施策と絡めて的確で具体的な指導講評をいただきました。

続く懇親会では、一〇五名が参加し、来賓の谷ヶ崎照雄日高市長の挨拶に続き、眞嶋廣久埼玉県退職校長会事務局幹事の乾杯の発声により、盛大に開催されました。現職校長と退職校長とが和やかな雰囲気の中、学校経営等について語り合うなど、交流が深められ有意義な会となりました。

一 子どもがかがやく学校とは
本校は、開校三七年目、児童数六〇五名、各学年三学級の中規模校です。「子どもがかがやく」とした理由は、東井義雄先生の「どの子どもも星」という詩からとりました。

子ども一人一人が、いろいろな場面で個性を発揮し輝いてほしい。教師には、子どものよさを認めその輝きを伸ばしてほしいという願いが込められています。
二 かがやく学校
づくりのために

子どもがかがやくためには、授業、行事、生活を充実していくことが肝要です。そのため、次のことを進めています。

まず、授業の工夫改善です。授業の初めはめあての確認と見通しをもたせ、授業の中心はペア学習やグループ学習による学び合い、授業の終わりはまとめ、振り返りをするという流れを中心としています。特に、タブレット端末や大型モニターを活用したり、グループにホワイトボードを用意したりして、主体的・対話的で深い学びの実現を目指しています。

さらに、今年度は道徳科や新学習指導要領で導入されるプログラ

子どもがかがやく学校づくり



川越市立
新宿小学校長
宮崎 厚

ミング教育、外国語活動にも力を入れて取り組んでいます。
次に、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた教室環境づくりを進めています。児童が落ち着いて生活できるように、教室の全面は必要最低限の掲示物にしたり、棚は布等で目隠しをしたりしています。また、物の置き場所を決めたり、テニスボールを椅子に取り付けたりもしています。

最後は、学校行事を充実することにも力を入れています。本校では、児童が主体となって行う全校児童集会や新宿小まつり、地域の方々の協力による地域ふれあいまつり、運動会や音楽会など様々な行事があります。子どもが輝いている場面を多くの方に見ていただくことが、学校の信頼を高めるよい機会と捉え、教職員の総力を結集して取り組んでいます。

三 おわりに
今後は、社会に開かれた教育課程が求められます。そのために、どのような教育活動を行い、どんな子を育てていくかを保護者や地域と共有するとともに、児童一人一人が未来の創り手となるよう取り組んでいきたいと思えます。

「一番とは一人のみ達し得るの座なり、一流とはすべての人の至り得るところなり」長野県の教育者、毛涯章平先生のお言葉です。

本校では、教育活動を個人の力に頼る個業ではなく、教職員の力を協働させ「一流の中学校」になることを目指しています。一流とは、人の心を動かせる、人に感動を与えることと定義し、生徒たちは、一流の挨拶や無言清掃、一流の体育祭・文化祭

・合唱祭、そして一年生はヤングアメリカンズに本気で取り組んできました。

いじめの問題については、薩摩藩の郷中教育から引いた「身体のことをいじめな・できなことをいじめるな・ちがうことをいじめるな・よってたかってい

じめるな」という言葉を使い、学校朝会はもちろん、入学式や保護者会でも話し、保護者も巻き込んでいじめ撲滅に向かっています。

また、生徒会本部が立ち上がり、生徒総会でいじめ撲滅宣言を行いました。この宣言に同意する生徒は、自らサインをして「いじめなしの木」をつくり全校でいじめ撲滅運動に取り組んでいます。

学力向上については、主体的・

「一流の中学校」を目指した学校づくり



坂戸市立
坂戸中学校長
杉本 竜之

対話的で深い学びの実現に向けて「学び合い」の授業を行っていません。本年度は研究主題を「学力向上を目指した「学び合い」の授業づくり」ハイパーQ Uを活用した学級づくりを通してと設定し研究を進めています。ハイパーQ Uとは、学級集団をアセスメントし、より適切に支援をするための補助ツールです。担任は、学級や生徒の実態を客観的に把握し、より安心安全な学級をつくり、そのなかで学力向上を目指しています。調査を行うだけではなく、分析

として適切な対応の方法を学ぶために専門家を招聘し、年間五回の研修会を計画的に進めています。生徒の主な活躍に關しては、二八年度女子駅伝部と陸上部一名が全国大会、二

九年度、陸上部三名が全国大会、女子駅伝部が関東大会、吹奏楽部が西関東大会に出場しました。今年度も、全国大会に陸上部二名、水泳一名、関東大会に卓球一名、そして吹奏楽部が西関東大会に出場しました。これらの大会でも観客の心を動かす一流の活躍ができました。

今後とも教職員が協働し「一流の中学校」を目指してまいります。

毛呂山町の流鏝馬は、平安時代の後期（一〇六三年）に源頼義・義家父子が奥州平定のため、出雲伊波比神社で戦勝を祈願し、凱旋の際に再び毛呂山を訪れて流鏝馬を奉納したのが起源とされている。この流鏝馬は、春と秋に行われ、春は小学校入学前の幼子が、秋は十歳から十五歳ぐらいの少年が射手となり、どちらも地域の安寧を願うものである。

伝統文化の継承 毛呂の流鏝馬まつり (毛呂本郷流鏝馬を守る会の活動)



毛呂山班
退職校長会
小山 恒夫

種類あり、毎年九月初旬より我々守る会で製作を行っている。○的宿について 的宿は流鏝馬祭りの拠点である。祭馬は、各祭馬区からの宿に行き、乗り子を乗せ神社に向かう。神社の行事が終わると的宿へ戻り、乗り子を降ろし祭馬区へ戻る。また、的宿は「房切り・追い出の餅つき、出陣の儀式」等を行う重要な場所である。

○流鏝馬まつりの流れ 稽古始め 十月下旬に祭馬が到着し朝稽古が始まる。三日が稽古納めで、乗り子は精進潔斎のため神社にこもる。 乗込み（十一月一日）祭馬は、神社からの的宿へ向かい、乗り子はこの日から精進料理を食す。

現在の、三つの各祭馬は一の馬、二の馬、三の馬と呼ばれ、一が白で源氏を、二が紫で藤原氏を、三が赤で平氏を表し、各祭馬区が毎年輪番で祭馬を出している。 毛呂本郷は昔からの的宿が置かれ、的宿の準備や本祭りでする製作を担ってきた地区である。その製作技術を継承するため、昭和六一年に「毛呂本郷流鏝馬を守る会」が作られた。主な活動は、祭具の製作を中心に、的宿の準備や乗り子の着付け、馬の髪結い等である。

○祭具の製作 祭具には、矢・花笠・神頭・ツト・爪切り・ブチ・願的など十数

重殿行き（十一月二日）祭馬は、的宿より重殿淵へ向かい馬を清める。その後、前久保と神社へ寄りの宿へ。夜中には餅つきを行う。 本祭り（十一月三日）朝の終了後野陣を行い、的宿へ戻り出陣の準備をする。正装した乗り子は酒盛りをして出陣する。神社では夕的が始まり、願的・騎射・扇子・ノロシ等、日が暮れるまで馬上芸が繰り広げられる。

会員の声

元気をもらって！

入間東部 宮 陽一

退職して三年。毎日元気パワーを園児からもらい頑張っているところ。三月三十一日に退職し、日を空けず四月一日の幼稚園職員会議に挑んだ時には、とまどいまして。しかし、四月八日に入園式を迎え、毎日登園降園の園児たちと元気に大きな挨拶を交わすうち、気持ちが生きていきときました。やはり教師は、子どもたちと接してこそ、生き甲斐を感じるのかもしれない。

また、子どもたちと遊んでいると、たった三年間とはいえ、それぞれの成長が感じられます。思いどおりにならないとだだをこね、泣いてばかりだった子が、しっかりと自己主張し行動する姿は圧巻です。また、子どもたちの発想力の素晴らしさにも驚かされます。何においても元気パワーの源を園児からもらって生活しています。

地域貢献

入間 飯国 治

昨年度、退職を待っていたかのように地元の自治会役員の話が舞

い込んできた。二度目であり断りきれず引き受けることとなった。

学校の往復と土・日の少年サッカー指導の日々で地域との係わりはゼロ。更に出雲の出身。現地域とはほぼ無縁な人間である。そんな私に町内会長の重責が務まるのか。前会長と地域巡り、地元の重鎮の方々への挨拶からスタート。地域独特の行事、各種挨拶、市からの依頼等々。認識し、こなすのに精一杯の一年目であった。

二年目の今年には活動に少し余裕ができた様に思う。その様な中で振り返ると、地域の高齢化・一人住まいのお年寄り・若者の行事参加離れ、役員への参加拒否等々課題も山積している。しかし、今の立場として、活気ある地域づくりを責務と捉え職務を全うしたい。

第二の人生ままならず

越生 滝田陸男

不覚にもハートに重傷を負い、九死に一生を得た。定年まで五年余、ローソクの様にと意を決して前へ進んだ。お陰様で無事にゴールできた。

フリーの身となり、第二の人生をスタート。体調を整えヨーロッパへ四回八か国、歴史遺産に学び、美しい古都の街並を散策、満喫した。油断は禁物。六三歳半ば、再びダウン。夜明けのハートカテーター手術で一命を取り留めた。他の難局も乗り越え、平穩無事の到来、高齢者となった。季節の太陽を肌野菜作りを始め、晴耕雨読・TV・愛犬散歩が日課となった。六〇代最後、十一月のスペイン行きを決めた。夜明け、七〇歳になら。奇しくもその日、白内障手術となってしまう。

人生ままならず。喜寿まであと七年、明日は明日の風が吹く、前へ！

思いを繋げられる幸せ

所沢 川音孝夫

四月からは科学技術振興機構に勤務し「ジュニアドクター育成事業」を担当しております。

この事業は科学技術イノベーションを牽引する傑出した人材の育成に向けて、小中学生を対象に体系的育成プランを大学や高専、NPO、企業、全国十九の機関が開発実施することを支援するものです。教諭のときは、科学技術に対する知的好奇心・探究心を高める授業づくりに励み、管理職としても科学館を活用した校外学習を先生

方と実践したり、卒業式期を迎える三年生に特別な理科の授業も行ったりました。講話も科学を題材にしたものが多かったように思います。

科学に係る仕事に残りのエネルギーを注ぎたいと考えています。もう少し頑張ります。

祭礼絵巻

川越 村松一男

教員を退職して十五年目になります。現在地元自治会の顧問・氏子総代(川越氷川神社と町内のパイプ役)をしています。

先日の川越まつりでは、神幸祭に参加しました。川越祭(氷川祭の山車行事)は、十月十四日に氷川神社が行う例大祭を源として、直後に行われる神幸祭と氏子町内の方が催す山車行事から成り立っています。今年の神幸祭は秋晴れに恵まれ、花笠、袴姿に着替えた後、召立の儀で呼名、氷川神社前道路に整列、一時出御(出発)。行列は志多町坂上↓札の辻↓蔵の町並(幸町)↓仲町↓松江町二↓大手町↓かつて西大手門があった市役所前(市長挨拶)へ進み、二時三〇分すぎ還御しました。三七年の歴史ある神幸祭に参加させていただき感謝しています。

日本刀の研磨を通して

日高 結城昭司

定年の数年前に居合道を始めたのが日本刀との出会いです。そこで日本刀と拵、金具等の美しさに目を奪われました。定年後には、刀剣研磨の師匠を探して弟子入りの許可を得、日本美術刀剣保存協会主催の刀剣研磨や白鞘作成、柄巻等の研修会に参加したり、研磨コンクールへ出品したり、刀剣研磨等の修行に日々励んでいます。

刀剣研磨は、鎌倉時代から続く伝統技術で多くの掟や手順があり、それから外れると日本刀を壊すこととなります。現在は、刀剣研磨の掟と技術を守る刀職関係の人が激減しており、日本刀文化は危機的状況にあります。私は刀剣研磨等の伝統技術を守り、後世に伝承できるように努めたいと思います。最近では近隣や自治会等の包丁を研ぎ、地域の貢献も始めました。

歴史小説を楽しむ

飯能 山下忠夫

私は、古代から中世の中国大陸を舞台に描かれた歴史小説、わけでも宮城谷昌光氏と北方謙三氏の作品にハマっています。

太古の商王朝を舞台とした「天

空の舟」から、後漢王朝の創成期に活躍した呉漢を描いた「呉漢」まで、宮城谷氏の作品はその含蓄のある格調高い文章が魅力です。

また、宋朝初頭の楊氏一族を描いた「楊家将」から、かの成吉思汗の生涯を追う「チンギス紀」まで、北方氏の作品には、人物の躍動や息遣いまでが伝わってくるダイナミックな力強さがあります。

「文字を追って占の世界に没入し想いを巡らす」こと、それは私にとって心躍る楽しい時間です。

私は、これからも、目前にある多くの書を、それこそ飽きもせず日々、読みふけていきます。

自分らしい音

所沢 山本直子

退職してすぐに音楽短期大学に入学しました。若者と同等の演奏力を要求されることは厳しいことですが、学びは刺激的です。

音大の先生方が異口同音におっしゃるのは、「自分らしい音を求める」ということです。

「合唱の全国大会を見ると、どの学校も『同じ声』の集合体だ。『体という楽器』は、人それぞれ違うのだから、統一するのは『声そのもの』ではなく、体の響かせる場所や音楽の方向性だ。異なる

声が集まり、一つになる時、合唱は真に豊かになる」と。

これは、「学級や職員室づくりと似ています。『みな同じ』ではなく、何を共通にし、何を個性とするのか。音大で学ぶことが、これからの「見方・考え方」を変えてくれると思うと、ワクワクします。

幼稚園の思い出

狭山 高橋光幸

私の勤めていた幼稚園では、運動会の近づいた昼休みになると、園庭は園児のリレーで賑わった。

運動会には年長児の全員リレーがあるからだ。年長児が夢中に走り応援する様子を見て、年下の園児たちも加わる。

ある時、一緒にリレーをしていた年下の子が、負けた悔しさから泣きながらチームを抜け出した。様子を見てみると年長の一人の子が追いかけて、何とかまたチームに引き戻しリレーが始まった。終わった時、泣いていた子には笑顔が戻っていた。私は年長児に、「素晴らしかったね」と声をかけた。年長から年下の子へ素敵な思いやりのリレーが見られたひとときだった。

退職して七年目。三月末までの三年間を過ごした幼稚園は子供の

秘めた力に驚かされる日々だった。

自彊術に出会って

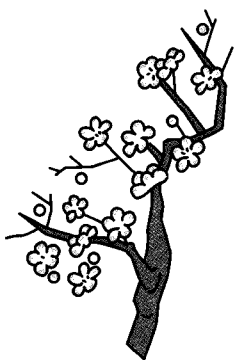
川越 新井 均

私が今、熱を入れ取り組んでいるのが自彊術という体操である。七二歳の時、胃と膀胱に癌が発見され、その反省から始めた。

自彊術は大正五年には愛好者三百万人を数えたが、その後廃れたようである。戦後、東大医学部出身の近藤芳朗医博により医学的解明と復興がなされ、現在に至っている。

この体操を入院手術後の七四歳から実践。毎年の定期検査で異常なしは勿論、血圧、血糖、中性脂肪、コレステロール等正常値で推移している。故に薬は何も服用していない。二十分の時間で、畳一枚分の場所だけで済む。身体各部分を前後、左右、上下に動かす十方伸展の体操で、これを一日二回実施すれば良い。

今後、この自彊術の普及にも努めて、医療費削減に少しでも貢献できればと思っている。



班だより

会員の生きがいを交流

入間班 染井佳夫

入間班は会員数五二名という中規模の組織ですが、教育の場で、また他分野で、各々の会員が生きがいをもって日々活動されている様は、まさに多士済々の観があります。

とは言え、「還暦を過ぎての入会が普通」という当会は年々高齢化が進みます。生きがいを維持続けることが肝要とされる所以です。そこで、入間班では「退職校長会だより・さわやか入間の風」を年間五号発行し、会員の活動の様子等を広く紹介しています。

①ベテラン会員による書評。永井荷風の戦中日誌『断腸亭日乗』を読む

②退職後の学びなおし(大学に社



風雪の中で(会員作品)



別れの日(会員作品)

会人入学して)の記

③紙上木版画展(旅先の風景等の版画とともに旅行記を紹介)

④「私の卒論」社会人入学した大

⑤「今月の俳句」季節にマッチした俳句の紹介と解説

⑥写真クラブで腕を磨く会員による「季節の一枚」

⑦会員による「お気に入りの旅先」を写真と文で紹介(岩手・沖縄

谷/松代以下は市・県の退職校長会の旅行記)

⑧海外日本人学校に赴任した会員による現地(教育)事情紹介

等を掲載してきました。

A3判一ページという小さな紙面、年間たった五号という小規模なメディアではありますが、年一回の総会(五月)・懇親会(忘年会・十二月)とともに会員相互の親睦と情報交流に大きな役割を果たしています。

実利的な研修会

毛呂山班 宮崎幸夫

毛呂山班は会員二一名と小規模班のため、総会、研修会、懇親会が主な活動内容です。

研修会は、「切り絵の描き方」、「写真の撮り方」、「陶器造り」などのように実利的な内容で、講師も会員が務めています。

しかし、昨年度は、井上健次町長を招いての研修会を実施しました。「農業塾」に関する要望があったからです。氏は、高校卒業後「鯉淵学園」(茨城県の中核的農業経営者を養成する大学校)で専門的に農業を学ばれました。現在、町長という要職に携わる傍ら、農業に勤しみ、「農業塾」を主宰し、新しい農業の担い手の育成に尽力されています。本会員の中にも塾生として学んでいる者がいます。

講演は、「町政の現状と課題」、「食生活は安全か」(例・山菜そばのわらびは国外産が多い、黒ごまは黒色がコーティングされた国外産が多い。)、 「今後の農業の在り方」等、生活に直結する内容で、大変参考になりました。

本年度は、会員の小山恒夫氏を講師として十二月末に予定しています。氏は、「人間地区教育推進研究協議会」の退職校長会代表の



研修会風景

発表者で、テーマは「伝統文化の継承・毛呂の流鏝馬まつり」です。「流鏝馬」というと、出雲伊波比神社の馬場を疾走する祭馬の雄姿が思い描かれますが、その華やかな舞台を支え、祭具(花笠、矢、神頭、ホイホイ棒、ブチ、願的他)の製作や諸々の準備をする大勢の裏方がいます。小山氏は、その「流鏝馬を守る会」の一員として長きにわたり尽力されてきました。その裏方の仕事と苦勞の一端を共有できたらと思います。

今後も、実利的な研修を地道に実施していきたいと考えています。

生きがい

今日も元気 明日も元気に

川越 加治 進

庭の福寿草が、ぷっくり顔を出した。春がもうそこまで来ている。皆さん元気でお過ごしですか。

私の一日は、新聞やテレビを見ることから始まります。必ず見るのは、ニュースと天気予報と健康の番組。

「元気の秘訣は何ですか」と、問われると、こう答えている。「エスカレーターやエレベーターに乗らない。階段を昇る。電車やバスに乗ったら、できるだけ立っている」と。

健康といえば、「自分のからだは自分で守る」と心がけ、健康や病気に関する講演会やシンポジウムには、できるだけ参加している。それも聞くだけでなく、実践することを心がけている。

毎日顔を合わせるのは近所の人。「おはよう。こんにちは。いい天気ですね。」と声かけを大事にして、毎年バス旅行には必ず参加している。今年はどこへ行くのかな。

また、職業を越えた人たちとの交流も大事にしている。いきがい大OBの人たちと出かけた例として、印象に残ったことを二、三紹介してみよう。



生きがい大OB会で説明する私

○上ツみちをたずねる

鎌倉街道の三つのうちの二つが今の埼玉県を通っていた。そこを探しに行ったこと

○見附を見つけないで行こう

江戸城を守るためにつくった見附のうち四ツ谷、市ヶ谷、赤坂の見附を見つけたこと

○アンテナショップ探し

今は、名が知られてきたアンテナショップを探し歩いたこと
等々、会話と見聞、友情が深まったこと。

去年も川越まつりの時、たくさんの卒業生に出会えた。「先生、お元気ですね。おいくつになられたのですか。同窓会でまたお会いしましょう。」など、たくさんのおふれあい、枚挙に遑がない。これからも元気で張りをもって過ごしていきたい。

私と写真

毛呂山 生方哲夫

私には、生きがいと言えるほど立派なものはありませんが、好きで熱心に取り組んでいることはあります。それは、写真です。なんだ、スマホで簡単に写せるあれか、と思われるでしょう。そう、私はあれが好きなんです。

私は十歳の時、初めての東京旅行をしました。その時、写真好きの父が、私にメイカイフレックスという小さな二眼レフカメラを買ってくれました。私は大喜びで東京の街や人や家族を撮りました。田舎に帰って、父がプリントしてくれたその写真を見た私は、感激し歓声を上げました。それから今日まで六十余年、私はずうっと写真が好きなんです。

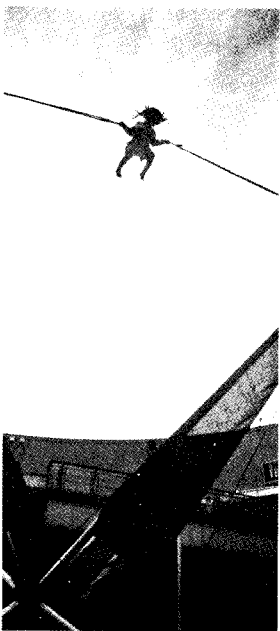
大学に入った私は、状況や事件や時代の本質が結晶化したかのようなすごい写真を知りました。又、ベトナム戦争の報道写真に強い衝

撃を受けました。かくして、写真の力や特性を幾らか理解した私は益々写真が好きになったのです。

私の写真はコンピュータはおろか、電気は全く使わない機械式カメラに白黒フィルムをつめて撮影します。フィルムは暗室で現像とプリントをします。暗室は四十年前に造りました。けれど、不器用で仕事の遅い私が、撮影に出かけたり暗室にこもったりできるはずがありません。そんなわけで暗室開きは定年後となりました。

私は、デジタル時代の今も、フィルムと機械式カメラと暗室を使っています。その理由は三つあります。一つ目はそれが好きだから、二つ目はこの方法が私の思いや個性を出しやすいから、三つ目は単なる複写や記録を超えた写真をつくり易いからです。

知恵をしぼり、手間をかけ、撮影と暗室作業に熱中し、その結果得られた一枚の写真に一喜一憂する。これは、生きがいというより



東京瞬間光景
お台場2005年

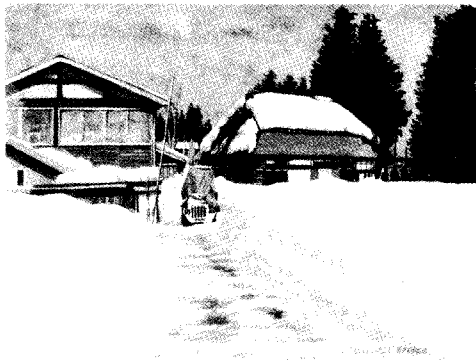
趣味と呼ぶのが適切でしょうか。そう、写真は私にとつて、大好きでやりのある生涯の趣味なんです。



「光の中へ」(押し花絵)
川越 中山 日出子



「江戸東京たてもの園」
所沢 橋本 千恵子



「新潟県高柳町の民家」
坂戸 島田 知良



「晩秋の野尻湖と向こうに黒姫山」
飯能 小久保 則之

事務局だより

幹事長 柳 榮治

会員の皆様には、日頃より人間地区退職校長会の振興のために、ご理解とご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

◆本会の目的は、人間地区退職校長の親睦と福祉の増進、教育の振興に寄与することです。目的を十二分に達するため昨年来諸事業を見直し、本会の充実・改善を図っているところです。通信運搬費の経費節減、総会の開催時刻を午後、研修旅行参加費の軽減やバス発着場所の変更など、また、埼玉県退職校長会へ研修費増額等に関して要望書を提出し、その成果が上がっております。

◆平成三一年度埼玉県退職校長会総会は、人間支部が担当し、六月七日(金)十時「ウエスタ川越」で開催されます。

現在人間支部の総力をあげ、総勢百名で実施委員会を組織し準備を進めています。人間支部全会員の皆様には、十二時五〇分よりアトラクション(尚美学園大学出演・松尾鉄城氏)に是非ご参加くださるようご案内申し上げます。

編集後記

人生百年時代と言われ、ますます高齢者の学び続ける姿勢にスポットライトが当たっています。

先日のテレビ放映で、健康要素の一つとして、本や雑誌を読むという項目が上がっていました。

それは、書物検索のために行動することや常に文字活字に触れ、知的好奇心を煽る行為そのものが、心身共に健康でいられる要因となるということです。

加えて、食・職・触の三つのシヨクをより意識して生活することが、健康寿命を延ばす秘策ともいわれています。

その「触」の一助にこの広報紙がお役に立てれば幸いです。

年二回発行している「いるま」を紹介して、会員の皆様の生き方に触れ、その活力を享受出来たらと考えます。

今後幅広い紙面づくりに努め、会員相互の「触」の場を広げていきたいと考えております。(熊本)

人間地区退職校長会会報

発行 平成三一年二月一日

発行者 会長 井上 清

発行所 川越市並木新町一〇一二〇

印刷所 川越印刷株式会社 TEL 049-122-1144